

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

22

中央公論社

ゾ ラ

訳者 平岡篤頼

昭和43年12月1日初版印刷

昭和43年12月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

ナ
ナ

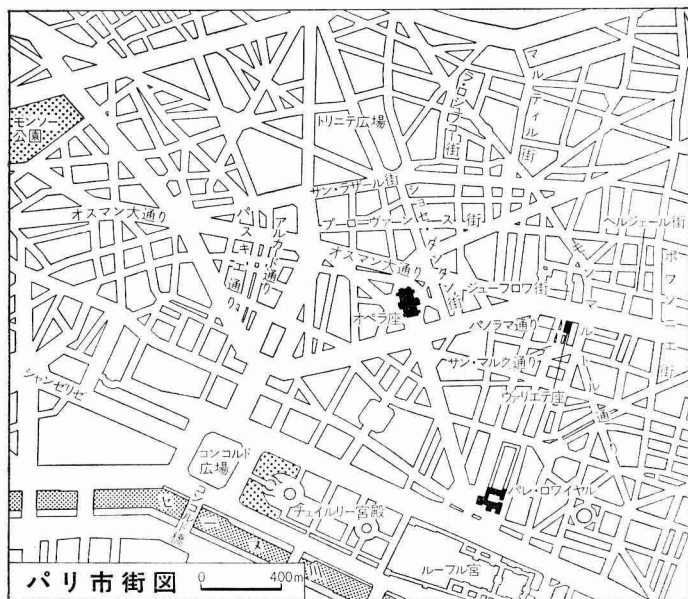
年 解
譜 説

目
次

507 486 3

ナ

ナ



九時になつてもまだ、ヴァリエテ座の場内は空つぽだつた。数名の観客だけが、ちらりほらりと、二階張出し席や一階正面席の暗紅色の肘掛椅子に腰かけて、光を弱くしたシャンデリアのほの明かりの下で開幕を待っていた。大きな赤い幕が闇に没していた。そして舞台からは物音ひとつ聞こえず、フットライトも消え、楽士たちの譜面台が散らかつたままだった。ただずつと上のほう、はだかの女や子供がガス燈で緑色にすすけた空を飛んでいる、天井の円蓋のまわりの天井棧敷では、絶え間のないざわめきのなかから呼びあう声や笑い声がとび出し、布帽子や靴つきの帽子をかぶつた男女の顔が、金で縁取つた大きな円い弧の下に重なりあつて見えた。時折、切符の半券を手にして、せわしそうな案内係の女が姿を見せ、自分の前の紳士と婦人を押してゆくと、燕尾服を着たその男と、ほっそりとして姿勢のいいその女が、席につきながらゆつくりと場内を見わたすのだった。

二人の青年が一階正面席に現われた。彼らは突つ立つたまま、あたりを見まわした。

「だから言つたじゃないか、エクツール？」と、年上のほうの、黒いちよびひげをはやした大柄な青年が言つた。「早すぎたよ。葉巻を吸いおわるぐらい待っていてくれてもよかつたじゃないか」

案内係が通りかかった。

「おや、フォシユリーさん」と、彼女は親しげに言つた。「まだ三十分は始まりませんよ」

「じゃどうして、九時開幕だなんてびらを貼りだすんだろう？」と、エクツールがつぶやき、その瘦せた長い顔が憤慨したような表情を見せた。「今朝も、この芝居に出るクラリスが、八時きっかりには開場だつて断言してたんだけ」

しばらく彼らは黙りこんで、暗がりのなかのあちこちの棧敷席をうかがつた。だが一面に張りつめた緑色の壁紙が、棧敷のなかを、なおいっそう暗くしていた。一階では、張出し席の下の棧敷は、完全な闇のなかに飲みこまれていた。二階の棧敷には、たった一人ふとつた婦人が、ピロードの手摺にぐったりもたれているだけだった。舞台の両側では、高い円柱にはさまれた前棧敷は空つぽで、長い総縁飾りのついた垂布を張りめぐらしてあつた。

とどころ淡い緑色で引き立てられた、白と金きんすくめの場内が、クリスタルの大型シャンデリアの弱い炎のおかげで、細かい埃きりでも立ちこめているみたいにぼんやり霞かすみんでいた。

「リュシーのために例の前栈敷をとってやれたのかい？」と、エクートルがたずねた。

「ああ」と、相手は答えた。「もっともちよっと苦勞したがね……なに、リュシーがそんなに早く来る氣づかないさ、あの女のことだから！」

彼はかすかなあくびを囁みころし、それから、しばらく黙りこんだあとで、

「君は運がいいよ、まだ初日ってものを見たことがないのね……『金髪きんぱつのヴィーナス』は、きつと今年の話題になるぞ。半年も前から噂うわさになってるんだ。いやはや、君、たいした音楽なんだ！ 氣きのきいてるのなんのって！……ボルドナーヴってやつは、商売を心得てるから、こいつを万国博覧会ばんらんかいのときまでしまっておいたのさ」

エクートルはうやうやしく拝聴はいしやうしていた。彼が質問した。

「あのナナとかいうニュー・フェースが、ヴィーナスの役をやるらしいけど、君は彼女を知ってるのかい？」

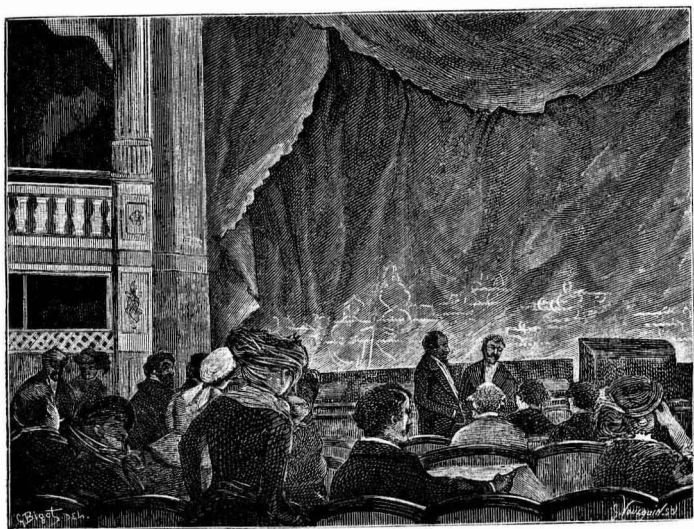
「おい、君もか！ いい加減かかんしてくれ！」と、フォシ

ュリーは腕を宙にひろげて叫んだ。「今朝から、おれはナナの話でうんざりしているんだ。二十人以上の人間に会ったんだが、あっちでもナナ、こっちでもナナ！ おれの知ったことかね！ おれがバリじゅうの女をみんな知っているともいうのかね！……ナナなんてのは、ボルドナーヴのでつちあげさ。さぞ面白いことになるだろうさ！」

彼は氣をしずめた。しかしがらんとした場内、シャンデリアのほの明かり、このひそひそとささやく声やドアの開閉の音にみちた、教会を思わせる静寂が彼をいららさせるのだった。

「どうにもやりきれん！」と、いきなり彼は言った。「ここにいると、やたらにじじむさくなってくる。おれは出るよ……下へ行ったら、もしかしたらボルドナーヴに会えるかもしれない。彼が詳しいことを教えてくれるだろう」

階下の大理石を敷きつめた玄関ホール、改札が設けられているあたりでは、観客の群れが姿を見せはじめていた。開け放した三つの鉄柵てつさくから、四月の美しい夜空の下で、うごめき燃えたっている大通りの熱っぽい生氣が流れこむのが見てとれた。馬車のがらがらいう音がびたりととまり、ドアがぱたんと閉まると、客が何人かずつか



たまつてはいつてきて、改札の前で立ち止まり、正面の二つの階段をのぼってゆくのであるが、そこで女たちがからだをゆれめかせて少し遅れをとる。ガス燈のまぶしい光のなかで、貧弱な帝政様式の装飾が張子の寺院の柱廊みたくに見せているこのホールの青白いむきだしの壁に、黒々と大きな字でナナの名前を書いた、大きな黄色いポスターが、どぎつくべたべたと貼りめぐらしてあった。何人かの男たちが、通りがかりにふと引っかかったみたいに、それらのポスターを読んでいた。突つ立ったまま、雑談して入口をふさいでいる男たちもいた。切符売場のそばでは、ひげを剃りたての、だだっぴろい顔をして、どっしりとした体格の男が、なんとか切符を世話してくれと言いはる連中にぶっきらぼうな返事をしてゐる。

「あれがボルドナーヴだ」と、フォシユリーが、階段を降りていきながら言った。

しかし支配人のほうが、先に彼を見つけていた。

「おい、君はなかなか親切じゃないか!」と、彼に向かって遠くからわめきたてた。「あれで記事を書いてくれたつもりなのかね……今朝『フィガロ』紙をあけて見たんだ。ところがなんにも載ってやしない!」

「まあ待ってくれ!」と、フォシユリーは答えた。「あ

んたのあのナナのことを書くには、まず彼女を知らなきゃならん……それにぼくは、なにも約束したわけじゃないよ」

それから、その話を端折るために、彼は徒弟を紹介した。エクトル・ド・ラ・ファロワーズといって、教育の最後の仕上げをするためにパリへやってきた青年だ。支配人は、ちらっと一目で青年を値踏みした。だがエク

トルは、感動して彼をじろじろ見つめていた。これがあのボルドナージュなのか、女を売物にしながら、まるで監獄の看守みたいに彼女たちを酷使するあの興行師、いつでも頭から湯気を立てるみたいに、何か新しい宣伝の方法を思いつき、わめき、つばをはき、膝をたたき、辛辣で、憲兵みたいに口うるさいあの男なのか！ エクトールは、何か愛想のいいことを一言いわなければならな

いと思った。

「あなたの劇場は……」と、澄んだ声で彼が言いはじめた。

ボルドナージュはそれを、いかにも率直な物言いをお好む男といった調子で、ずばり露骨なことを言って平然とさへぎった。

「わしの淫売宿いんばいどと言ってくださいらんか」

するとフォッシュリーが、賛成と言わんばかりに笑いだ

したが、ラ・ファロワーズはお世辞が喉のどにひっかかったまま、大いにむっとし、それでも、その言葉に感心したような顔つきをしてみせた。支配人は、とんでいって一人の劇評家と握手したが、それは大きな影響力をもつ演劇欄を担当している男だった。支配人が戻ってくると、ラ・ファロワーズも落ち着きを取り戻していた。あまり呆気にとられていると、田舎者扱いされるのではないかと心配していたのだった。

「なんでも噂によると」と彼は、とにかく一言いおうとして、もう一度きりだした、「ナナはすてきな声をして

いるらしいですね」

「あれが！」と、支配人は肩をすくめて叫んだ。「とんでもないがらがら声さ！」

青年は急いでつけ加えた。

「でも、たいした役者だとか」

「あれが！……大根さ！ 手足の動かし方ひとつ知らないんだ」

ラ・ファロワーズは、いくらか顔を赤らめた。どうしていか、わからないのだった。彼はつぶやくように言った。

「なにはさしおいても、今夜の初日だけは絶対見逃すまいと思ひましてね。かねがね、あなたの劇場が……」



「淫売宿と言つてくだらんか」と、またしてもボルドナーヴが、信念にみちた男の冷徹な強情さで、さえぎつて言った。

そうこうする間、フォシユリーは落ち着きはらつて、入場してくる女たちを眺めていた。彼は従弟が、笑うべきなのか怒るべきなのかわからなくなつて、ぽかんと口をあけたままなのを見ると、やつてきて救いの手を差しのべた。

「ボルドナーヴを喜ばしてやれよ、彼の言うとおりに淫売宿と呼んでやれよ、そのほうがうれしんだから……それに、君は君で、ぼくたちを煙にまくのはやめろよ。

君のそのナナが、歌も演技もへたと云うんなら、君の芝居は惨憺たる失敗になるだけじゃないか。もつともぼくは、じつさいそうなるんじゃないかと心配してるんだがね」

「失敗だ！ 失敗だつて！」と、支配人はわめき、その顔が真っ赤になった。「女優に演技や歌が必要だつていうのかね？ いやはや、フォシユリー君、君もばかだな……ナナには、はばかりながら、もつとほかのものがあんだ！ それも一切を償つてあまりあるものがね。おれは狙いをつけたんだが、あの女にはえらくぐつとくるところがある、それが間違ひなら、おれの嗅覚も間拔

けということになろうさ……いまにわかるさ、見てみろ、あの女が姿を見せるだけで、満場の観客が舌を垂らしっぱなしになるから」

彼は大きな両手を宙にひろげたままだったが、その手が熱狂的に震えていた。それから、ほっと一息ついて、声を低め、自分ひとりでぶつぶつ言っていた。

「そうとも、あの女は伸びるぞ、いや、絶対確実だ！ そうとも、きつと伸びるとも……あの肌ときたら、ああ！ すごい肌だ！」

それから、なおもフォシユリーがたずねるので、彼も承諾して、いろいろとこまかい情報を与えたが、その表現の露骨さがエクトール・ド・ラ・ファロワーズを辟易させた。彼はナナを知つて、彼女を売り出そうと思つていた。ちょうどそのころ、ヴィーナス役の女優を探していたのである。もともと彼は、いつまでも一人の女にかかずらわっているような男ではない。むしろ、すぐに観客にもその女を鑑賞させるという趣味なのだ。しかし彼の小屋では、立派なからだをしたこの女がやつてきて以来、上を下への大騒ぎで、彼がひどく手こずっていることが一つあった。一座のスターであるローズ・ミニョンは、演技力もあり、歌もうまいのだが、これがライヴァルの出現を感じていきりたち、毎日出てゆくと云つて

彼をおどかすのである。そして、ポスターのことになると、いやはや、なんという騒々しき！ 結局彼は、二人の女優の名前を、おなじポイントの活字で印刷させることにした。そもそも、ぐずぐず言われることの嫌いな男なのだ。シモースであれ、クラリスであれ、彼のいわゆるこまっしやくれどもが言うことをきかなければ、尻を一発蹴とばしてやるだけだ。そうでもしなけりや、やってゆけるものではない。あんなあばずれどもなら、いくらでもいる、どうせ値打の知れたやつらだ！

「おや！」と、彼は話を中断して言った。「ミニヨンとスタイネールだ。相変わらずお揃いだな。君も知ってるだろうが、スタイネールはローズが鼻につきだしてるんだよ。それで彼が逃げ出しはしないかと思つて、亭主が彼を片時も離さないのさ」

歩道の上には、劇場の軒蛇腹で一列の炎をあげているガス照明が、まばゆい光の幕を投げていた。二本の丈の低い木が、どぎつい緑色を見せて、くつきりと浮き出していた。円柱の一本が、あまり強烈に照らし出されているので白っぽく映り、まるで真つ昼間みたい、そこに貼つてあるポスターが遠くからでも読めた。その向こうの、大通りの濃い闇のなかには、依然として流れつづける群衆の波にまじつて、商店の明かりが点在していた。

多くの男たちはすぐには入場せず、外にとどまつて雑誌しながら葉巻を吸いおろろとし、それを照らすガス燈の光が、彼らの顔に血の氣を失つたみたいな蒼白さを添え、アスファルトの上に、彼らの黒々としたすづまりの影を浮きあがらせていた。背も高く、肩幅もひろく、緑の怪力家じみた四角ばった顔をした偉丈夫ミニヨンが、人ごみを押しのけて通路をひらきながら、小柄で、すでに腹が突き出て、まんまるな顔に半白の顎ひげをめぐらした銀行家スタイネールの腕をとつて、無理に引っぱってきた。

「やあ！」と、ボルドナージュは銀行家に言った。「昨日あなたは彼女に、わたしの部屋でお会いになったんですよ」

「なんだ、あれがそうか！」と、スタイネールが叫んだ。「そうじゃないかと思つてたんだ。ただ、彼女がはいってきたときわしが出ていたので、ほんのちらつと見たきりなんだ」

ミニヨンは目を伏せてその話を聞きながら、指にはめた大きなダイヤモンドを神経質そうにぐるぐるまわしていた。ナナが話題になっていることがわかつていたのである。それからボルドナージュが、このニュー・フエースの人柄を紹介してゆくにつれ、銀行家の目にあやしい光

が見えだしたので、とうとうミニヨンが口を出した。

「ほうっておきなさいよ、あんた、そんな淫売みたいな女！ 観客が体よくあんな女を追っぱらうに決まってるよ……スタイネールさん、家内が棧敷で待つてるんですよ」

彼はスタイネールを引っぱっていこうとした。ところがスタイネールは、ボルドナージュのそばを離れるのをいやがった。彼らの前では、観客の列が改札のところまでくずれ、騒々しい声が湧き起こっていたが、そのなかからナナの名前が、その二つの音綴の歌うような潑刺とした音を響かせて聞こえてきた。ポスターの前に突っ立った男たちは、声を出して彼女の名前を読むのだった。何かたずねるみたいない口調で、通りすがりにその名を口にするものもいた。一方、女たちはといえば、落ち着かない微笑を浮かべながら、ちよつとびつくりしたような顔つきで、そつとその名を繰り返した。だれも、ナナの何者たるかを知らなかった。ナナという女は、いったいどこから降って湧いたのか？ そこでいろんな噂がとび、冗談が耳から耳へとささやかれた。このナナという名前、親しみやすくてだれの口からでもひとりに出てくるこのかわいらしい名前は、まるで愛撫みたいなものだった。その名前を口にするだけで、群衆は浮き浮きし、子供っ

ぽくなるのだ。熱っぽい好奇心、狂乱の発作みたいな激しさをもらったあのバリの好奇心が、人々をかりたてていた。なんとしてもナナを見たいというのだ。一人の婦人はドレスの裾の装飾りをちぎられ、一人の紳士は帽子を紛失した。

「いやはや、そう根掘り葉掘り聞かれたって困りますよ！」と、二十人ほどの男の質問攻めにあつて、ボルドナージュがわめいた。「まあ、芝居を見てください……ちよつと失礼します、わたしを呼んでいるんで」

彼は、観客をたきつけることができたのに満足して姿を消した。ミニヨンは肩をすくめて、ローズが第一幕の衣装を見せるために待っているということ、あらためてスタイネールに思い出させた。

「おや、リュシーだ！ あそこ、あの馬車から降りるのは」と、ラ・ファロワーズがフォシユリーに言った。

事実それはリュシー・スチュワールで、四十格好の、えらく首の長い、瘦せてひきつった顔の、唇の厚い、小柄で不器量な女だったが、いかにもきびきびしていて、あでやかで、たいへんな魅力があった。カロリース・エケとその母親を連れていた。カロリースは冷やかな美人で、母親は、剝製みたいないやにもつたいぶっている。「あたしたちといっしょに来る？ 席をとっておいたの

よ」と、リュシーがフォシュリーに言った。

「とんでもない、ごめんだね！ なんにも見えないんじや！」と、彼は答えた。「ぼくは椅子席があるんだ、一階正面のほうがいいよ」

リュシーは機嫌をそこねた。彼女といっしょのところを見られるのがいやなのか？ それから、急に機嫌をなおし、話題を変えて、

「どうしてナナを知っているってあたしに言わなかったの？」

「ナナを？ 一度も会ったことなんか無いよ」

「ほんと？ あんたが彼女と寝たって断言した人がいるわよ」

だが、彼らの前で、ミニヨンが唇に指をあてて、黙るように合図した。リュシーがなぜかとなぜか、通りかかった一人の青年を指さして小声で言った。

「ナナの彼氏さ」

みんなが、その男のほうを見た。感じのいい男だった。フォシュリーは思い出した。それはダグネといって、女たちのために三十万フランの財産を食いつぶし、いまでは取引所でわずかな商いをし、ときどき女たちに花束を贈ったり、夕食をおごったりする程度の金を稼いでいる青年だった。リュシーが、すてきな目をしていると言

った。

「あら、ブランシュがいるわ！」と、彼女が叫んだ。「彼女よ、あなたがナナと寝たことがあるって言ったのは」

ブランシュ・ド・シヴリーは、きれいな顔にべったり白粉を塗った、ブロンドのむっちりふとった女で、たいへん気品のある、立派な身だしなみの、すらりとした男といっしょにはいつてきた。

「グザヴィエ・ド・ヴァンドゥール伯爵だ」と、フォシュリーがラ・フロワーズに向かってささやいた。

伯爵は新聞記者と握手をかわしたが、その間に、ブランシュとリュシーの間で激しい言い合いがはじまった。

彼女たちが、一方は青、他方はピンクの裾飾りのついたスカートで通路をふさぎ、二人の口から何度も、ナナの名前が威勢よくとびだしてくるので、人々が彼女たちの口論に耳をそばだてた。ヴァンドゥール伯爵が、ブランシュを連れていった。だがいまでは、ナナの名前が、期待でいっそう大きくふくらんだ欲望のために、一段と高い調子で玄関ホール隅々まで響きわたった。いたい、まだ始まらないのか？ 男たちは時計を取り出し、遅刻した連中は、馬車がまだ止まらないうちから飛び降り、歩道であちこちにかたまっていた連中もなかにはい

った。散歩者たちがゆつくりと、その歩道のがらんとしたガス燈の明かりのなかを横切りながら、劇場内をのぞこうとして首をのぼすのだった。口笛を吹きながらやってきた一人の少年が、戸口のボスターの前に立ち止まった。それからしゃがれ声で、「いよう、ナナ！」と叫び、尻をふり、古靴を引きずりながら、また歩いていった。どつと笑い声が起こった。立派な身なりをした紳士たちが、「ナナ！　いよう、ナナ！」と口真似した。押し合ひへし合ひし、改札のところでは口論がはじまり、群衆をおそう例のばかばかしい駄洒落と唐突な官能の興奮のなかで、ナナを呼び、ナナをもとめる声のどよめきから成る喧騒がますます激しくなった。

だがその騒ぎよりも一段と高く、開幕のベルが聞こえた。「ベルが鳴ったぞ。ベルが鳴ったぞ」というどよめきが、大通りにまで達した。それと同時にみ合ひがはじまり、みんなが一度に通ろうとし、その一方、改札係の人数もふえた。ミニョンは、落着かない様子で、ローズの衣装を見に行かなかったスタイネールを、ようやく引っぱっていった。最初のベルが鳴るやいなや、ラ・ファロワーズは群衆をかきわけ、序幕を見逃すまいとしてフォシユリーを引きずっていった。観客のこのあわて方が、リュシー・スチュワールを憤慨させた。女性を突

きとばすなんて、この無作法な男たち！　彼女は、カロリース・エケやその母親といっしょに、最後になった。玄関ホールはがらんとした。外では、大通りが相変わらず間延びした唸りをあげていた。

「まるでここ芝居がいつでも面白いとでもいうみたいだよ」と、階段をのぼってゆきながら、リュシーが繰り返して言った。

場内では、フォシユリーとラ・ファロワーズが、自分たちの席の前に立って、もう一度あちこちを見まわしていた。いまは、場内は煌々と輝いていた。ガスの大きな炎が、クリスタルの大シャンデリアに黄色とばら色のきらめく火を点火し、それが円天井から平土間へと光の雨となつて降るのだった。座席の暗紅色のビロードが漆のような波紋を見せ、その一方では天井のあまりにもどぎついペンキの下で、金泥がきらめき、淡い緑色の裝飾がその派手な輝きをやわらげていた。吊り上げられたフットライトが、不意の光の滴のなかに幕を燃えあがらせ、そのずっしりと重そうな緋色の垂布には途方もない宮殿の豪華な感じがあつて、亀裂が金泥の下に漆喰をのぞかせているといった、周囲の造作の貧弱さと好対照をなしていた。場内はすでに暑かった。譜面台に向かって、楽士たちが楽器の調子をあわせていて、フルートの軽やか